

都ノ本ノ立タルヲ取去テ、新キ上筵ヲ敷テ、可^ニ入給キ由ヲ申ス。三位ノ中將殿、人ニ懸テ入テ臥給ヌ、持經者ハ水ヲ浴テ、暫許有テゾ出來タル、見レバ長高クシテ、瘦セ枯レタリ、現ニ貴氣ナル事无限シ、持經者寄來テ云ク、風病ノ重ク候ヘバ、醫師ノ申スニ隨テ、蒜ヲ食テ候ヘドモ、態ト渡ラセ給ヘレバ、何デカハトテ參候也、亦法花經ハ淨不淨ヲ可撰給キニモ非子バ、誦シ奉ラムニ、何事候ハムト云テ、念珠ヲ押攤テ寄ル程ニ、糸懸モシク貴シ。○下略

〔源氏物語二
帝木〕こゑもはやりかにていふやう、月比ふびやうおもきにたへかねて、ごくねちのさうやくをぶくして、いとくさきによりなん、えたいめん給はらぬ、まのあたりならずとも、さるべからんざうじらはうけ給はらんといとあはれにむべくしくいひ侍り、いらへになにとかはいはれ侍らんだ、うけ給はりぬとてたちいで侍にさうぐしくやおぼえけん、この香うせなん時に、たちより給へと、たかやかにいふをき、すぐさすもいとおし、しばし立やすらふべきにはた侍らねばげにそのにはひさへ花やかにたちそへるもすべなくて、にげめをつかひて、さゝがにのふるまひしるき夕暮にひるますぐせといふがあやなさ、いかなることづけぞやといひもはせず、はしり出侍ぬるにをひて、

逢ことのよをしへだてぬ中ならばひるまもなにかまばゆからまし、さすがにくらとくなどは侍きとしづくと申せば、君だちあさましと思て、そらごとてわらひ給。

〔源氏物語湖月抄二
帝木〕ごくねちのさうやく細 土用のひるなどいひて、薬に用る事のある也、祇草藥はひる也、夏の暑氣などに用る物にや、

〔後拾遺和歌集二
十〕ひるくひて侍ける人、今は香もうせぬらんと思ひて、人のもとにまかりたり、けりに名残の侍けるにや、七月七日につかはしける、君がかすよるのころもをたなばたはかへしやしつるひるくさしとて